没後百年の透谷像

―透谷評伝を書きおえて――

平岡　敏夫　氏

ただいまご紹介いただきました平岡でございます。透谷没後百年ということで、透谷の母校早稲田大学の透谷講演にお招きをいただきまして大変光栄かつうれしく思っております。

私はこの小野梓講堂に入って思い出したんですが、いまから二十八年前の昭和四十一年ですけれども、この講堂で「夏目漱石研究史論」というものを二時間ばかり、日本文学協会という学会で発表をやったことを思い出しました。本日は一時間、まあ延びてもよろしいというお話ですが、限られた時間ですけれども、最近北村透谷の評伝を何とかまとめましたので、その一端をお話してみたいと思います。

お手元のレジュメをご覧いただいて、それに拠りながらお話したいと思います。

最初に、第一～七章まで、実は私の本の目次でありまして、すべてにわたって全体をお話することはできませんので、項目だけを挙げておきまして、そのうちのほんの幾つかを中心にお話したいと思います。

まず祖父母と父母というのが最初に出ていますが、これは第一章の3になっておりますが、ここのところについてお話することになります。

二番目には東京専門学校というのがありますが、これは第二章の2のところに出ております。

次に民権運動というのがありますが、これは後で色川大吉さんがお話になると思いますので、特に述べることはしません。

あと、第三章の文学への出発、第四章の文壇への登場、この辺も非常に大事なんですけれども、透谷の文学が最も充実し、展開したと思われる第五章、第六章の人生相渉論争、山路愛山の評価というところに重点を置こうと思っております。そしてまた内部生命論、この辺に言及して、最後のほうで透谷の亡くなる前の話を、これは実際は4の「エマルソン」―死とその前後、というところでやっていますが、お話したいと、そういう順序でいきたいと思います。

まずおじいさんの玄快という人でありますが、これは勝本清一郎さんが『透谷全集』を編まれた昭和二十年代から三十年初め、あの『透谷全集』の第三巻なんかは非常に詳しい年譜とか、家系とか出ていますけれども、後から次々と資料が出てまいりまして、今度小田原市立図書館が透谷展をやりまして、立派な図録が出ていまして、そこでも系図その他が詳しく出ております。これは新しい資料が発見されたものですから、それに基づいているわけですけれども。

ちょっと披露しておきますと、これは今回早稲田の透谷展を企画された委員の一人の川崎司さんが発見されたことですが、「足柄士族北村快蔵父、大内玄快」というのがあるんですね。これは小学校ができるについて寄付をしたというものですが、そこに大内という姓が出ているわけです。この「大内」というのは一体何であるかということについても、まあ私の本などで書いてはいるんですけれども、これはまだ問題として残っております。

このおじいさんの北村玄快ですけれども、最近の小田原での資料では、「玄斎ト申シ候。私儀、実ハ曽我伊予守様御家来、伊達玄覚弟ニテ」と書いてあって、それで玄快が私は「玄斎ト申シ」ました、というんです。だからこれが出たとき、私はビックリしまして、大内玄快なんていっていますけれども、伊達玄斎という人間だったんだということを知ったわけですが、曽我伊予守というのは一体何者であるかということもまだわかっていないし。まあいろいろ調べてはおりますけれども。

それから、この伊予守の家来の伊達玄覚でありますが、兄弟のことにつきまして、玄覚が兄さんで、その弟が玄斎ですが、その中にもう一人、玄周というのがいたわけで、これは「御領分相州竹松村在医　玄周」と、姓がついておりませんね。つまり、表向き名字帯刀が許されていない村医者であります。これが玄快の次兄なんですね。この人が結局は大内玄周ということになるわけで、なぜその兄さんの大内が弟玄快の姓として川崎さんが発見された明治八年の資料に載っているかということはちょっとわからないわけですけれども、これは一つの問題としていろいろ考えられるわけです。

まあ、透谷のおじいさんがどうした、こうしたって、一体何の意味があるんだと言われるかもしれませんが、これはやはり透谷の血脈ですね、どういう人間であるかというような問題において、やはり考える必要があるだろうということが、評伝というか、伝記では考えられます。

弟は垣穂といって日本画家でありましたが、その人が書き残した「過去帳」というのがありまして、現在この「過去帳」は垣穂の五番目のお嬢さんが持っておられるわけですが、それは私の『透谷研究』の続のほうに載せてありまして、そこで大内家の由来というのをいろいろ書いてあります。

そのこととどう関係するかがまた問題なんですが、「大内家文書」と書いておきましたが、正式には『江戸中期以降の大内家の古文書』なんですね。この大内家は現在南足柄市で大内病院を経営しています大内というわけです。だからもう江戸中期からずうっと医者をやってきた家柄なんですね。その大内行雄という病院長の方はことし（一九九四）の一月に亡くなりましたが、いろいろ貴重な資料が入っております。そのことの一端も私の本には書いてあります。

そこで、その大内家云々ということから離れまして、玄快

という人がどういう人であるかとか、いろいろなことは書いてありますし、とにかく養子に入ってから、三十石ぐらいだったのを四十二石までにあげた小田原藩の藩医です。

森鷗外の家も津和野藩医で五十石でしたけれども、こちらは四十二石ということで、まあ藩医としては低いほうですよね。医者だといっても、相当上の何百石という医者がおりますが、殿様の脈を見るような医者は身分が高いわけです。これはそういう医者ではないわけです。

それから「祖母チカの秘密」ということが書いてありますけれども、どういうわけか、子供が何人も生まれているのに、いきなり離婚になってしまって、それっきり杳として行方知れずなんですね。で、透谷が富士山に登るときに、現在の都留市ですが、谷村（やむら）といっていたところの長安寺というお寺に血縁の人の墓があるからというんで立ち寄っているわけですが、血縁の人というと、もうこのおばあさんのチカさんしか考えられないというんで、私も長安寺の「過去帳」を二度にわたって調べまして、お墓とか、いろいろ見ましたが、その「過去帳」の中に「チカ」という名前が二人発見されました。

一人は赤ん坊で死んでいますので問題にならないんですが、一人はどうも玄快よりかなり上の人で、違うんじゃないかということでありましたが、実際は、小田原で最近公開されている「親類縁者覚え」というものによりますと、平田氏であるということがわかってきました。大体五、六十石の侍の娘さんですね。しかし離婚後どうなったかということはさっぱりわからないわけで、結局私たちは継祖母のミチという人については、透谷と一緒に暮らしていましたので、そのことは知っているわけです。愛情が薄かったとか、いろいろと言っておりますけれども、透谷にとってはもちろんチカという人は幕末に離婚していますのでよくわからないわけですけど、血はつながってはいても、実際に関係はあまりないということになると思いますが、研究者の立場としてはやっぱり調べてみなきゃいけないんじゃないかと思っております。どうも都留市のお墓のほうはもうちょっと見込みがないだろうと思っておりますけれども。

透谷が富士山に登るということも、何でもないようなことですけれども、よく色川さんが言っていたんですが、富士山にいつ登ったか、明治十六年か、十七年か、十八年か、これだけでもう博士論文が書けると言われるぐらい文献がありますし、またそれぐらい重要な意味を持っているわけです。

その途中に、富士吉田で羽田という御師（おし）の家に泊るのですが、羽田家に宿帳が残っていないか探しているのですけど、いまだにわからないわけです。「わかって何になる？」と言われれば、それまでですけど、富士登山の時期の確定という問題があり、また、透谷を理解するためには、わからないことはわかるようにしていくということが研究者の仕事だろうと思っております。

次にお父さんのことですけれども、「父快蔵の命運」と書きましたが、お父さんは大変悲劇的というか……。江戸時代は昌平黌といいますと、これは幕府がつくった官学唯一の大学でありまして、大変な秀才が全国から集まっていたわけです。しかしその昌平黌は明治維新以後になるとどうなったかというと、結局は政府によって潰されてしまいます。これは中でいろいろ内紛もあったわけですけれども。そうして幕府の持っていた蕃所取調所は開成所になりまして、それが東京開成学校。医学所からの東京医学校の方には森鷗外が入るわけですが、両者は明治十年に合併して東京大学と名前を変えます。

その反面、この昌平黌からきたのは、昌平大学という名前にもなったりしたんですが、結局は潰されまして、「卒業」という名前になっているけれども、実際は中退にすぎない。父快蔵は建白書を藩主に出すとか、いろいろ、志があり元気のある人だったんですけれども、官吏というものは結局どこを出たかという学歴によって今日なお左右されるところがありまして、一生判任官でした。いまはありませんが、判任官というのは軍隊でいうと下士官なんですね。奏任官というと将校以上になりますけれども。そういう運命をたどるわけです。

その一番大事なことは、明治十九年一月十八日に非職になったことですね。これは、官吏非職条例というものが十七年二月に出ている。これも国会図書館の法律関係を調べてわかったわけです。こんなのはもっと早く調べればよかったようなものですけど、「非職」という言葉は、京都大学人文研究所の飛鳥井雅道さんなんかも言っていましたが、官吏非職条例というのがあったことがわかりました。

これは月給が三分の一になるというものでして、いまの制度ではちょっとわからないんですが、官・職という言葉がありました。官・職のうち、官は残っているんですけど、職がないんですね、それが非職なんです。だから役所に出て来る必要はないわけですけれども、身分としては、官としてはあるんですが、月給は三分の一と。そのとき四十円の月給でしたから、十三円三十銭ぐらいの月給になってしまったんですね。これは後で申しますけど、東京専門学校に再入学した透谷がこれで東京専門学校をやめるようになったんだということが言えると思います。これは私の推定というか、判断でありますけど、ほぼ間違いないと思っております。

そこでもうひと言、父快蔵について言っておきますと、これはどなたもご存じの、森鷗外（森林太郎）でありますが、第一回生として明治十四年に東京大学（帝国大学というのは明治十九年の帝国大学令からなるわけです）を卒業して、その年陸軍軍医副（中尉相当官・奏任官）になった。明治十二年十月の「海・陸軍武官官報」によりますと軍医副というのは八等である。明治十四年に快蔵は十年勤めて五等属の十二等である。鷗外の年は実際は十九歳。彼は医学校に入るときに年をごまかして入りましたから公称は二十一歳で、快蔵は

三十九歳で、相当年が違って倍ぐらい違いますが、それなのに逆に十二等と八等の違いがあって、奏任官と判任官の違いですね。

正岡子規の句を引いておきましたが、「冬帽の十年にして猶属吏なり」。属吏というのはちゃんとした官吏の階級でありまして、一等属、二等属とか、十二等属とか、そういうふうに属、属とついているのは属官といいまして、判任官なんですね。いまでいうといわゆるノンキャリアということですね。冬帽をかぶって十年間役所に通ったけど、なお属吏であると、そういう属吏の悲しい気持ちを正岡子規が歌ったものなんですね。そのとき快蔵はちょうど十年勤めていましたので。まあ子規の句は後ですけど、非常に象徴的な句だと思います。

こういう非常に下積みの生活をして、また再就職を水戸の裁判所にしたんですけど、結局は何をやっていたかというと、現在は裁判所の仕事でなくなっていますけど、昔は地所の売買ですね、地所を買った、売った農民がありますが、その登記事務です。それを、土浦の次に石岡というところがありますが、石岡からずうっと入ったところに柿岡というところがあります。そこで二人ぐらいが、登記所という役所の出張所に勤めていてそこの横についている小さな部屋で自分で煮炊きなどをしながら、月に一ぺん帰るか帰らないかという生活を快蔵は送っていました。写真が透谷展にも出ていましたが、数寄屋橋の交差点のところにちょっと洋館風の家がありますね、あそこで奥さんのユキさんが煙草屋をやっていたんですね。透谷が亡くなった後、廃業しているんですが。

そういう父快蔵の命運というようなものは北村透谷の思想形成にやはり大きくあずかっているんだと思います。非常に恵まれた高等官といいますか、そういう家庭にもし生まれていて、順調にいっていれば、やっぱり透谷のような発想は出てこなかったんじゃないかと私は思っているわけです。

それからお母さんのほうですけど、これもまた大事なことでありまして、教育ママという言葉があるので、こう書いておきましたが、この方はなんと小田原藩士大河内宇左衛門・マキの三女として生まれて、北村家は四十二石ですけれども、二百石なんですね。二百石というんだから、実際はこれは大変なもので、藩によってちがいますが、上級、あるいは中級の武士であります。で、男兄弟がいない、五人姉妹の三番目の子です。門太郎と垣穂という男の子を二人産みましたが、男子と一緒に育ったことのない女姉妹の場合、男の子の扱いに幾らか違いがあるのだろうかというようなことが、心理学の本とかいろいろ出ているようですけれども。

男児の活発な戦闘遊戯などを好まぬのは「婦女子の性」(と、これは私の言葉ではありませんで、透谷の書簡に書いてあるんですが)としても、男兄弟を持たず、五人姉妹で育った女性にはことに著しいものがあったかも知れません。十歳前後の子に毎夜十二時ごろまで勉強をさせ、「看守」している

というのも、二百石から四十二石の家へ嫁いできたユキの北村家再興の夢が強いたものであったかもしれない。夫は「大学」卒とは言え、エリート・コースとは言えぬのであり、エリート・コースの大学南校・東校系の開成学校・医学校は、明治十年に東京大学となり、その翌年、玄快病気のため、空しく小田原へユキは夫、次男とともに、ひきあげて来ていたわけです。

それでまた特訓をやるわけですね。

これは、森勝子さん、透谷の弟の垣穂のお嬢さんですが、いまも東京小金井に元気でいらっしゃいますけど、透谷の姪御さんがいまも存命でいらっしゃるなんていうのはちょっと不思議な気がしますけれども、まあそれぐらいまだ近いということも言えます。

その方に私は伺いましたが、五人姉妹の中でこのユキさんという人は一番頭がよかったそうです。それで結局一番早く嫁いで行って、そして行儀もよく、礼儀正しく、裁縫もよくできて、賢夫人の典型だと。なりは小さい方だった。しかし神経質で、打ち明けてものを言うということをあまりしなかった人らしいですね。こういう方はえてして打ち明けてものなんか言いませんね。ちょっとしたことでも自分の恥になっちゃいけないとか何とか考えますから。賢夫人ですけどねえ、そういう方が教育ママになるんでしょう。で、人に決して弱みを見せなかった人のようです。

透谷というのは顔、形がお母さん似で、垣穂という人はお父さん似だったそうです。お父さんは非常に豪快な人で、財布を落としても知らなかったとか、そんなことを言っておりますけどね。

そんなことはやっぱり大事なことだろうと思いますね。これが東京専門学校の問題に関係してくるんですよね。

二番目の透谷と東京専門学校に移りますが、少年の夢とか、泰明小学校とか、いろいろあるんですが、自由民権運動の熱にかかります。明治十四年に東京の泰明小学校に転学しまして、明治十四年に自由党が創立されますが、非常に影響を受けるわけですね。これは色川さんのお話があると思いますけれども。

東京専門学校云々のところで透谷の進学について少し話したいと思います。私の『評伝』でこれはだいぶ書いておりますけれども。透谷が泰明小学校を卒業したのは明治十五年一月十三日であるわけです。透谷は明治十四年十二月だと書いておりますけれども。泰明小学校の古い写真が透谷展にも出ておりましたが、卒業の年の十五年はもう困死すべき年だったと言っています。そういうひどい年だといって、理由を五つ挙げているわけです。

一つは非常に親しんだ谷口校長が北海道に行ってしまった。これは川崎さんの非常に詳しい研究があって、透谷展でも谷口校長の履歴書が出されていますね。これはほんとに珍しい

ものです。それから遺族の方も川崎さんは全部調査されていますけどね。

それから岡千仞の漢学塾に入ったけれども、不愉快だったと。

三番目には、青年党という仲間が散り散りになってしまった。

四番目は、政府の弾圧がひどくなった。

五番目は、母親が、「わが家の女将軍」と言っていますが、非常に厳しかったと言っています。

私はこの五番目のほうに、さっき言ったお母さんが教育ママとして十二時過ぎまで子供を特訓するというところですね、これは、何としても府立中学校へ入れたいと。府立中学校、大学予備門。大学予備門というのは後に変わって第一高等中学校になりまして、後で第一高等学校になって、現在駒場の東大教養学部の前身になります。そして東京大学に入っていくと、そういうコースですね。これがエリート・コースで、自分の夫、透谷のお父さんの快蔵が落ちぶれてしまった江戸時代の昌平黌の流れの大学の途中で、名前だけ大学で、明治政府は全然相手にもしないような学校だったものですから、どうしても新しい大学、東京大学に入れなきゃだめだということをお母さんは痛切に思って、それで特訓に次ぐ特訓といいますか、そういうことをやっていたんだと思います。

透谷は何も書いていませんし、いままでの伝記でもそのことは出ていませんけれども、結局これは府立中学の受験に失敗しているというふうに私は思っています。

彼は放浪癖がありまして、勉強を持続してやらないわけですね。しょっちゅうあっちこっち……。自由民権運動の関係もありますけど、それだけじゃなくて、鎌倉へ行ったり、千葉へ行ったり、いろんな遺跡とか、そういうのを見てまわっているわけですね。

東京に第一府立中学校と第二府立中学校とあったんですが、尾崎紅葉は東京府立中学校の第二の方に入りまして、後に第一と合併しますが、いまの日比谷高校の前身です。夏目漱石は明治十二年にこの府立中学校に入っています。それから正岡子規は松山の出身ですけど、これも漱石と同じ年に松山の県立中学に入っています。漱石が入るときでも、四百人の志願者で、百二十人が合格していて、三倍以上の競争率ですから、わが透谷は残念ながら落ちちゃったんですね。

そんなことはどこにも書いていませんよ。ですけど、お母さんのこの特訓ぶりからいっても、お父さんの運命から考えましても、当然それは考えられるわけなんで。共慣義塾で勉強したと言っていますけど、当時の私立塾をずうっと調べますと、これも従来全然出ていませんけど、共慣義塾は私立中学校でした。そこに入っているんですね。

私立中学校から大学予備門なんてとても行けない。まあ当時塾がたくさんありましたから、そこで特訓やれば行けるん

でしょうけれども、結局、泰明小学校を出たときの明治十五年十月二十一日に開校した東京専門学校へ入ることになるわけです。これは改進党系の学校であるわけですけれども、自由民権運動にかぶれたのが改進党系に入るかというような問題があるし、お父さんは役人であるということもあるわけですけれども。

これは先ほど岡澤館長からのお話もありましたけれども、明治十四年の政変で参議であった大隈重信は、これも皆さんご存じのことですが、とんでもないことを政府がやろうとしたわけで、北海道のある大変な財産を、これは具体的に資料を挙げましたけれども、千四百万円といわれる官有物を参議兼開拓史長官黒田清隆によって、無利息で三十年月賦という法外な条件で、薩摩の五代友厚、長州の中野梧一らの関西貿易会社に払い下げるわけですね。これは参議大隈重信だけが反対したんですが、それで結局参議大隈重信をクビにして、明治天皇が東北巡幸して帰京するのを千住の宿のほうまで出迎えて、そこで決めて、断行した。これを明治十四年の政変といいます。それで野に下った大隈重信が学校をつくろうとするわけですね。その学校が東京専門学校なんです。

大体そういうふうに政府ににらまれてというか、政府に反対して下野した人が学校をつくるというと誰でも思い浮かぶのは、西郷隆盛が鹿児島で私学校をつくったことですね。西南の役は明治十年でありますから、あれで政府は手を焼いたわけですから、それ以来、政治家が野に下って学校をつくるというと、それはもう政府をやっつけるためじゃないかというので、スパイがこの辺をウロウロしていたわけです。まあ聴講生にもなっていたかもしれませんね。恐らく学生は何百人もいやしないわけですけど。

これも『早稲田大学八十年史』に書いていることですが、東京府南豊島郡早稲田村に大隈重信が別邸を持っていた。で、アメリカで天文学を勉強していた養子の英麿さんという方が帰って来ていたわけです。だから理科系の学校をつくろうと思って、自分の別邸に開こうと思っていたんですが、政変によって下野したものですから、理科だけじゃなく、政、経、法も教える学校を興そうと。

それで当時早稲田は見渡す限り田んぼでありまして、大体がみょうが畑だったそうですね。みょうがを食べると頭がおかしくなると言われておりますけれども。ともかくそのみょうが畑が広がっておりまして、大隈の別邸と道一つ隔てたところにバラックというか、校舎を建てました。これは大きな立派な油絵が透谷展に出ていますね。

結局「邦語をもって高等専門の学問を授け」というんですから、「邦語」というのは日本語ですね。当たり前じゃないかと思うんですけど、そうじゃないんですね。当時、東京大学では学科はすべて英語で、英書で学んでいたんです。日本人教師も英語で講義をしていた。そういう欧米心酔を遺憾とし

た大隈が学問の自主性を確立する方法として、「邦語による」ということをうたっているんですね。そして別に英語学科を設けると、こういうことをやったわけです。

とにかく寄宿舎にスパイが入り込んで官権が圧迫するとか、いろんな妨害があったわけですけれども、法律を専門とする専門学校の東京法学舎、これは後の法政大学。明治法律学校、後の明治大学。イギリス法律学校、後の中央大学。法律経済専門の専修学校、後の専修大学。こういうのが続々とできたわけです。しかし、結局その中では政治学をやらなかったんですね。これは政府の圧力を恐れたからです。しかし大隈さんは政治、経済ということを正面からうたって政治経済学科を設けたわけです。むしろ東京政治専門学校といった性格、そういうことで東京専門学校となったわけです。

東京専門学校開設広告というのが、郵便報知新聞に載っておりますけれども、「入学を許す者は年齢十六歳に満ち」とありまして、満十六歳から入れるといっておりますけれども、透谷は十六歳になっていなくて入っていますから、これもちょっといいかげんだったんじゃないかという気がしますが、十四歳と八カ月で入っています。

それで私が思ったことを申し上げますと、早稲田大学の歴史の鹿野政直先生の『近代日本の民間学』という岩波新書に驚くべきことが出ています。明治十九年に東京大学は帝国大学となりました。その帝国大学は、一八八六年の私立法律学校特別監督条規というものをつくりまして、帝大総長はいま言った専修、明治、東京、法政、中央の東京府下にある五つの私立法律学校の監督権を与えられたんですね。それでその条規によってこれらの東京専門学校を含む学校は帝国大学職員が臨時に監督に来るんですね。そして授業と試験の時間割りをあらかじめ提出せよと。えらいことですね。そんなことを決めていたわけです。

歴史学でいえば、津田史学と言われている津田左右吉先生という偉い方がおりましたけれども、あの方が大変活躍すると、帝大もだんだん変わってきまして、若手教授はその影響を受けるというようなことがありましたけど、その津田さんに対してもどういうことを言っているかというと、まあ皆さん怒らないでほしいと思うんですが、早稲田大学のいまの話じゃなくて、昔の話ですけれども、こんなことを言っているんですね。要するに、学歴がない人間がやった研究なんていうのは認められんと、そんなものを尊敬するなんておかしいと。東京専門学校を出ているというのは学歴じゃないんですね、そういう言い方をしています。

それからちょっとさかのぼりますけれども、東京専門学校の小林定脩という人が当時帝大総長であった井上哲次郎が書いた本を批判したものを書いたら、そのことを井上哲次郎はどう本に書いているかというと、「氏はわずかに東京専門学校を卒業したるくらいにて、我が輩の著書を誹謗する力なきは

もとより論をまたざるなり」と、ひどいことを言っていますね。東京専門学校なんか出たぐらいで帝国大学教授を批判する力は毛頭ないのは決まっていると、こういう言い方をしているような時代であったわけですね。

そこで、いま言ったように学問の自立自主でつくったわけですが、ちょっと余談ですけれども、正岡子規は自由民権運動の影響を受けていましたが、ぜひ東京専門学校へ行って自由の空気に触れたい、官立の学校なんか行かない、早稲田のそういうところへ行きたいんだと言っていたんですけど、実際蓋を開けたら、東京へ来たらどこへ行ったかというと、予備校へ行って、そして……。

おじさんが司法省のわりあい高官だったんですね。で、司法省では学校をつくっておりました。司法省学校と言います。そこへ行けばエリートになるんですが、その司法省学校は東大に吸収されまして法学部になるわけです。それで結局彼は大学予備門に入って、帝大へ。そしてご存じのように漱石と終生の親友になるわけです。漱石がロンドン留学中に死ぬわけですが。

夏目漱石、正岡子規、幸田露伴、尾崎紅葉、この四人の文豪は揃って慶応三年に生まれた。透谷は慶応四年・明治元年に生まれましたから、一年違いです。この中で、露伴は学校は東大じゃなくて、電信修技学校でトンツー、トンツーってモールスで、出てから北海道の余市の無線局で漁船の無線を受けるような仕事をしていて、辞めて帰って来て文学者になるんですが。子規、紅葉、漱石はみんな府立、あるいは県立中学校、大学予備門、東京大学というふうにいっているわけです。卒業したのは漱石だけで、子規も紅葉も中途でやめちゃったわけですけれども。

そういうエリート・コースを透谷はたどらなかったということですね。それは学力がなかったからというだけでもないと思います。結局はそれは運命かもわからないんですが、日本の近代において、その文学者になったということ自体がもう余計者なんですけれども、しかしながら、正岡子規、尾崎紅葉、夏目漱石という人たちを考えますと、透谷のコースはそういう人たちの文学とも違うわけです。結局東京専門学校をこういう形で選んできているということからして違うわけですね。そういう言い方ができると思います。

では、入った透谷ですけれでも、「政治少年と読書少年のどちらもが真実であるような門太郎」と私は書いておきましたが、川崎さんの調査では、「東京専門学校日記」というものがあって、明治十六年十月三日の項に「本日ヨリ図書縦覧室ヲ開キ図書之借覧ヲ許ス」「図書借覧人十五名内洋書三名和漢書十二名」、こんな状況だったんですね。いまこの中央図書館だけで全部で百七十万冊以上の本があるそうですけど、当時は借りる人が十五名ぐらいだというんですね。ですからほとんど今の小学校の図書室よりも小さいものだったろうと思いま

すが。

その図書室で日々本を読んでいたと言っておりますけど、果たしてどの程度読んだかですね。一面、同級生が言っていますように、「トラヴェラー」、旅行する人間と言われるぐらい、これは後で色川さんからお話があると思いますけど、三多摩各地を放浪して、いったん出て行くと六、七十日は帰って来ない、そういうような生活をしていたんですから、勉強もそんなにやったとは思えないんですが、日々図書室で読んでいたなんていうことも書いていますので、「政治少年と読書少年のどちらもが真実であるような門太郎」という言い方を私はしております。

透谷はその明治十六年の九月に入学したんですが、そのちょうど同じときに坪内逍遥が東京大学の第二科、これは政治学及び理財学といっていますが、そこを卒業して、親友の高田半峰が東京専門学校の先生をしていましたので、その勧めもあって東京専門学校の先生になったわけですね。だから透谷の入学と同時に就職をしているわけで、そこに接触があっただろうと思います。透谷の日記に東京専門学校でお世話になったということが出てきますし、横浜で「ハムレット」を観たときに日本人は逍遥と二人だけだったという有名な話もありますし、『蓬莱曲』という作品について逍遥からかなり批判されたということも出ていますから、関係はあったかと思いますが。

私がここでちょっとお話したいと思いますのは、社会進化論と天賦人権論の矛盾——改進党イデオロギーの問題——トラヴェラー、この問題です。逍遥はこの東京専門学校で英文の訳読と、西洋史、英国憲法史、社会進化論というのを教えていたようです。この社会進化論なんかはどこで接触したかわからないんですけれども、この社会進化論というのは大問題でありまして、先ほど井上哲次郎が東京専門学校程度の学力で俺の本を批判できないんだというようなことを言ったと言いましたが、その先の総長、加藤弘之が社会進化論を唱えまして、天賦人権論は自由民権運動のイデオロギーでありますが、人間は生まれながらにして平等である、人権を持っているという、そういう論でありますね。その論と、人間は生物、動物と同じように、優秀なものが結局生き残り、劣ったものは滅びるんだという、優勝劣敗ですね、そういう思想と真正面から対立して、これは天賦人権論争と言われております。

それを坪内逍遥はどの程度やったかわかりませんが、透谷はこの社会進化論に対して、天賦人権論の立場で考えていたと思います。そこには改進党イデオロギーというような問題も、東京専門学校は大隈さん、改進党がつくったわけですから、この問題とどんなふうになるんだろうか、その矛盾ですね。彼は学校へ入ったものの、あんまり勉強しないで放浪ばかりしているということも、それとどう関係があるかという、

そういう問題ですね。

それから最近私が聞いたんで、見ていませんけれども、逍遥の講義を非常に忠実な優秀な東京専門学校の生徒が記録したものが見つかりまして、それを原子朗さんが復刻したという話を聞きましたが（のち『修辞学の史的研究』）、それより前に逍遥は比照文学（現代の比較文学の前の名称ですが）、そういう講義をしておりまして、これは本になっております。

その中に、文学とは何かというと、快楽と実用という性格があるというような考え方がポスネットという人にあって、それを逍遥は講義しているんですね。そういう考え方を透谷は『日本文学史骨』で取り上げております。『日本文学史骨』、すなわち「明治文学管見」の中でやっておりますので、直接逍遥の影響かどうかわかりませんけれども、そういう関係があります。「逍遥と透谷」というのでちょっと小さい論文を書いたことがあって、私の透谷の本には入れておりませんけれども、また今後の問題であろうと思います。

自由民権運動を反映して政治経済学科に入るんですけれども、結局中退して、いま言ったようにトラヴェラーですね、英語科再入学ということになるわけですが、それも中退する。

ここで、明治十九年というのが、いま言ったようにお父さんが一月十八日に非職になったんですね。透谷はその前の年の九月に英語科に入ったわけです。これは名前が変わりまして、新設ということになっていますが、東京専門学校専修英学科というところに再入学して、四カ月経ったときにそういう十三円三十銭という月給になってしまうという大きな打撃がくるわけで、彼は自分で食っていかなければならなくなるというので、横浜で貿易関係かなんかの商売をやろうとして、大失敗するということが起こります。結局学校どころじゃなくて、なし崩しの中退となってしまったんじゃないかというのが私の推定であるし、これはほぼ間違いないというふうに思います。

だから透谷の恨みというものは、結局お父さんがそういうしがない官吏であるということもそうですし、それがクビを切られて十三円三十銭ぐらいしか取れないような状態ですね。そういうようなことで自分が学校をやめなきゃいけない。せっかく今度勉強しようと思って入ったら、だめになった。それはもう二重の裏切りというか、明治政府の仕打ちでありますから、そういう点でも批判的な精神を養っただろうと思っております。

レジュメの二枚目のほうへ入ります。いままでは大体伝記的な話でしたけれども、今度いきなり「人生相渉論争」に飛んでしまうようですけれども、先ほども申しましたように、東京専門学校、それから民権運動から離脱する。そして石坂ミナとの恋愛、そしてキリスト教に入信する。東京専門学校へ行って勉強しようと思ったのもだめになるし、その大変ひどい状態の中で、彼は自分の主体というものを自覚していっ

て、『楚囚之詩』を発行する。透谷展で大変珍しい『楚囚之詩』の現物が出ていましたね。透谷が署名して差し上げたところまで見つかっていますから。『女学雑誌』に投稿する。この『女学雑誌』の投稿についても、これらはすごい論文なんですよ。もう透谷文体といったものができている。まだ二十そこそこ、二十一歳ぐらいですけれども。

アイルランド出身の有名な詩人のゴールドスミスなんかの影響を受けまして、それをそっくりふまえた文章もあり、両者の比較研究もやってみておりますので、興味のある方は読んでいただきたいと思います。

それから『蓬莱曲』という、当時全然わからなかったと言われているんですが、こんなすごい長編劇詩をつくった人はいないわけですけれども、これを現在もなお「標の会」という劇団が何度も上演を試みていますので、これはすごいことだと思うんですが。この『蓬莱曲』をやるだけで何時間も話は出てくるんですけれども。

それから『厭世詩家と女性』。きょう透谷展の入口に岡澤館長のお名前で『厭世詩家と女性』がいきなり書かれていますね。「恋愛は人世の秘鑰なり」、恋愛なくして人生はないという、その文句は当時は大変衝撃的であったということが書かれていました。

それから尾崎紅葉や露伴や、彼よりも先に出ている一歳だけ年配ですね、そういう人たちを批判しています。そして芭蕉とか、近松というものを実によく受けとめて論じている。

それから小説として、『我牢獄』とか、『星夜』というのを書く。その『星夜』のモデルになったのが、透谷展で新しく出ています桜井成明、つまり明石ですね、川崎司さんのくわしい研究があるんですが、そういうことを知って『星夜』を読まれるとまた面白いと思います。

そして結局明治二十五年、透谷の後半の展開で国粋主義、欧化主義、両方にチャレンジして新しい方向を目指す、平和主義としましたが、平和運動にも関わる、それから「徳川氏時代の平民的理想」という論文を書く。それから「秘宮と他界」ということで、「秘宮」というのは人間の内部の深い生命の問題、「他界」というのは現実世界を超えた世界の問題。

それから透谷は非常にいいエッセーを書いていますが、私の評伝では「随想のなかの透谷」として（一）、（二）に分けて書いております。

そういうことを省略いたしまして、「人生相渉論争」というところで、きょうは特に山路愛山の評価について申し上げたいと思ってまいりました。この山路愛山と透谷との論争は、どなたもご存じですけれども、愛山は俗物で、どうしようもない文学のわからんやつで、透谷はすごいということになっていますが、そんなことを言うと、透谷はそんな人と論争してあんなに一生懸命やったのかというと、ばかばかしくなってしまうので、そうじゃないんで、やっぱり論争するだけの

相手であったわけですから、それを考えなきゃいけないという問題です。

そこに「愛山評価は結局透谷評価」と書きましたが、愛山が評価できないと透谷は本当に評価できないんじゃないかというのが私の年来の考えです。愛山は透谷評価のパロメーターとというのが私の考えでありまして、十分なことをお話できるかどうかわかりませんけれども、愛山評価というか、そういうことをちょっとお話しようと思います。

そこに書いてありますが、文学観、ひいては人生観がまっとうであるという自負によって、透谷の「空の空なるもの」の強調、「実を見貫く心」「大勇猛の権を以て」する別乾坤挺立の意味が、まっすぐに受けとめられなかったことを示している。(これは愛山にはまっすぐ受けとめられていないというんですね。それは私も認めているんですが)これを透谷の想・実二元論、(想と実に分けて考えるわけです。現実世界と想像世界です。文学は想で、実は現実と。いまでも通っている非常にわかりやすい二元論です。ところが愛山は想・実不可分論でありまして、想と実をそんなに簡単に切り離すことができないんだ。文学と実行とか、文学と政治とか、そういうものを簡単に引き離さないで、不可分であるという考えなんです。一元論という考えなんです)愛山の想実不可分論(一元論)というふうに要約すればわかりやすいが、ここから直ちに透谷の近代文学意識、愛山の前近代文学意識と括って、後者を否定し去るということがあってはならない、と思います。三家村裡の無名の英雄たちについて、「不幸にして我詩人は彼等のために歌はず、我が文人は彼等のために書かざりしを以て、彼等はただ口碑の中に活くるのみなれども」(つまり記録がないんですね。口伝えしか残っていない。三家村裡というのはその辺の村々ですね。その中で村興し、町興しといいますか、幕末ですから、全然領主や幕府の力を借りないで村民みずからが村を興していくわけですが、このあたりの民衆思想の研究については、安丸良夫さん以下、いろいろ研究が出ているわけです。そういうのが愛山の「近世物質的の進歩」という論文にあるんですが、この「物質的」という言葉だけでも、もう読まないような傾向があったと思います)云々と記す愛山の文章、文学観が今日忘れられてよいはずがないからである。透谷をダシにした近代文学的スノビズム、(これはちょっときつい言い方ですけど。透谷、透谷と言っていると、透谷が一番純文学で、偉いというように思っちゃったら、それはもう透谷神社の神主みたいになっちゃうんで、それではいけない。そういうのは俗物である、スノビズムであると私は思っているんですね)あるいは近代主義に陥らぬためにも、士太夫的な文学観は評価されなければならない。

武士から受け継いでいる、この国を、この村を、この町をどうするかという考え方、人間はどう生きるかとか、そういうのが士太夫的な文学観ですけれども、そういうものはやっ

ぱり評価しなきゃいけないんじゃないか。愛山はまさしくそういう文学観の持ち主であったし、透谷もそういう文学の持ち主であったわけです。

「頼襄を論ず」ということからあの「人生相渉論争」になったわけですけれども、これはまた考えたんですが、「頼襄を論ず」というのは、「頼襄」は頼山陽のことですが、大体この「頼襄を論ず」ということ自体が気にくわないといいますか、現代の文学者にしても、明治、大正、昭和を通じてもそうですけれども、頼山陽の評価がどうかという問題にも関係しているんですね。

しかし実際は今日頼山陽の評価というのは、中村真一郎さんの『江戸漢詩』とか、入谷仙介さんの『頼山陽・築川星巌』(岩波全書)とか、そういう本によりましても、これはそんないいかげんなものじゃない、本場の中国でもちゃんと評価できる立派な詩人であり、詩文だということが出ていまして、頼山陽の評価そのものも新しく変わろうとしております。入谷さんなんかは「新しい日本語の創造、新しい人間性の追求、そこに根底を据えた彼の詩が多くの人々から歓迎され、国民詩人として愛されたのは、あまりにも当然のことであって、それゆえに俗だなどというのは、高級ぶった評論家のさかしらにすぎないであろう」と、頼山陽を弁護しています。これは山路愛山の弁護にも関わってくるわけです。

大体頼山陽は明治維新に『日本外史』その他によって、大変大きな影響を与えたと言われておりますが、アカデミズムの歴史家はほとんど評価していないようですね。

「官学史学と民間史学」ということを書いておきましたけれども、山路愛山は民間史学の中に入るわけで、大した学歴はない。まあ東洋英語学校というところに学んではいますけれども、在野の歴史家でありますが、丸山真男さんの『日本政治思想史研究』、これは幕末における明治維新の原動力を評価した、高い評価を受けている本ですけれども、あの本なんかはもちろん頼山陽なんて全然問題にしておりませんね。そういうふうにしてアカデミニズムはそれを完全に無視するということで、これは鹿野先生の『民間史学』という本でもわかると思います。

この中で私が特に一つ申し上げたいことは、いま立命館大学の教授をしている上田博さんの『石橋湛山』という本なんですね。私はこの『石橋湛山』という本の書評をしたことがありますが、湛山は山路愛山をとっても高く評価しているんですね。湛山はいうまでもなく東京専門学校(早稲田)の卒業生で、大変優秀な人で、首相もやりました。一番短い総理大臣でしたけども。いまは全集も出ているし、研究する人も非常に多い、大変な人物でありますが、この人が「文豪山路愛山死す」というものを書いております。

夏目漱石がちょうどその前の年に亡くなるんですね。それで比較をしているわけですが、その比較が面白いわけですけ

れども、その書いたものだけ読んでみますと、

愛山を「天下第一等の歴史家と推服した」と言い、漱石の「明暗」を批判し、その恵まれた生涯に対して愛山の幕臣としての困苦・独学独修をあげる。二人の死に示された文壇内外の反応の差異に「この国の近代のあるいは近代文学観のある種の歪みが映し出されていると見た者が、湛山以外に居たであろうか。」という上田氏の言葉に私は胸を熱くする。湛山の愛山追悼文は「声涙下る名追悼文であるとともに、秀抜な日本近代文学史観とも読まれるものである。」と記す上田氏に私は深い共感をおぼえる。

と書いておきました。

漱石はいま大ブームでして、漱石全集を出せば出版社は不況を回復できるなんて言われているぐらいですが。

漱石は若くして高等学校または大学の教授として政府より外国にも留学させられ、帰って来ては学校の先生は嫌だといって新聞社に入り、高給を受け、博士号を与えられては、つまらぬと言って突き放し、しかしてその著述は世に珍しき売行きを示し、したがって資産も相当に蓄積された。愛山に至っては、すなわちこれに反し、徳川幕府瓦解の際における幕臣の子として、幼にして困苦をなめ、独学独習、かつては日本内地における学校の課程を踏んだことさえない云々、と

石橋湛山は、こういう対照をやっているわけです。

愛山について、帝国主義者であるというようなレッテルが貼られまして、それはだいぶ愛山評価にも関係していますが、これは上田さんも言っていることですけれども、愛山は現在明治文学全集で『山路愛山集』が出たし、三一書房で民友社思想文学叢書で『山路愛山集』というこんな大きな本が一・二と出ておりますので、名誉回復は十分できていると思います。

愛山の国家主義の問題についてもちょっと触れておきたいんですが、帝国主義といっても、それは国家の自由という問題で、個人の自由を守る貿易であって、国家間の関係については、他国を侵略し犠牲にすることは許されない、それがいわゆる愛山の帝国主義なんですね。つまり、国家間の自立ということは十分あるんで、侵略ということは完全に否定しているわけです。

平和会議というのがあったんですが、それに対しても、子供の遊びだといって批判する人がいるけれども、愛山はそれはそうじゃないんだと、「文明国がさらに親密な関係を有する大共同生活体とあるべき未来はすでに明らかに打ち出せりというべし」といって擁護しているわけです。

後でお話があると思いますが、色川大吉さんの今度の東京大学出版会の『北村透谷』で、国民国家形成期の明治に生きた透谷について、百年後の終焉期、いまや冷戦構造が崩れてソ連邦が崩壊する、そういう時代ですが、国民国家の終焉期

から相対化しようというふうにいっていますが、愛山の帝国主義もまさにその過程にありまして、平和問題にしても、「欧州の大局、近年大いに変化するところあり、平和主義の希望するところ実際に近づかんとす」という「海軍の拡張」という透谷の論文がありますけれども、そういう希望、国民国家が帝国主義の段階に突入しようとする時期ですね。それを愛山はたとえ子供の遊びと思われようとも平和会議というものを支持しているわけです。そしてこの希望の実現を図ろうとしているわけです。愛山は東京の市電が値上げするときのデモの先頭に立って行っていました。

この早稲田の国文科の教授であられた山路平四郎先生は愛山の三男であるから私は応援しているというわけでは全然ありませんで、愛山という人の魅力ということですね。この山路平四郎先生はもう早稲田を退職されていますけれども、父愛山について、受けた恩は絶対忘れず、いかなる場合も人を裏切らなかった、生涯を貫く正義感と反骨精神というふうなことを書いておられます。着物を着ていても、裏と表をひっくり返して着ても知らん顔をして着ているような人であったと言っています。三代揃って長男も次男も新聞記者、ジャーナリストですね。そういう反骨の精神を持っていた。江戸幕臣の末裔ですね。天文方でありますが。

あんまり愛山に時間を使って恐縮ですけれども、三時ぐらいまでは許されるだろうということでありますので、もう少しご辛抱いただきたいと思います。

愛山は慶応で歴史科ができたときに、その創立に招かれております。早稲田の講師もしたという記録がどこかにあるんですけれど、どうもその辺は確かめられていないんですが、とにかく民間史学ということをここで強調しておきたいわけです。

四番目の「他界に対する観念」、「内部生命論」というところへ入ります。今度評伝をまとめるというのは、没後百年というきっかけがあったわけですが、十何年かかっていたんですけど、最近二年間ほど仕事が多忙でなかなかできなかったわけですけど、色川さんの本が出て、あと、私たち透谷研究会の論集が出て、佐藤善也さんの論集が出てというような形で、また、いろんな記念行事があって、きょうもそれですけれども、大変刺激になってやっと私も書きあげたわけです。

そこで、ちょっと申し上げたいことは、一神教の問題です。これは、新保祐司論文「透谷における『他界』」、これは岩波の『文学』の透谷特集で出てきているわけですが、この問題がやっぱりあるわけです。ちょっと読ませていただきますと、

すでに旧論を繰り返して引いているように（「旧論」というのは私の文章です）、「宇宙の精神、即ち神なるもの」と神の外は動かせぬ沈静不動、自造的でありえぬ「内部の生命」への長年の着目（これは私がそういうことを言ってきたわけです）

つまり「内部生命論」というのは、宇宙の精神、すなわち神なるものがインスピレーションによって人間内部の生命にくるわけですね。それで内部の生命が生き返る、再生されるというシステムなんです。

ところがその問題を、われわれはどうもいままで、宇宙の精神、すなわち神なるものなんていう得たいの知れないものをあんまり信用していなかった。少なくとも口では言っていてもそれを強く考えることをしなかった。

私はもちろん考えてはきていたんですが、もっと突っ込んで考える必要があった。ところがそこに新保祐司さんという私よりはずっと若い評論家が現れまして、これは客観的プレッシャーによるんだ、内部を動かす神という絶対的外部というものがあるんだと、こういうものを考えなきゃ、透谷なんかやっても全然わかっていないんだという、非常に激しい論文を出されています。これは大変面白いものなんですが。

こういう点を見ないで、透谷はただ内部の生命を発見し、重んじたとするのは全く間違いである。内部を動かす神がまずある。その動かす神、客観的プレッシャーが存在するんだ。そのことを考えないでやると、単なるロマンティシズムの範囲に透谷を置いてしまう。透谷はこの客観的プレッシャー、一神教によるんですけれども、ぶつかったことによってロマンティシズムを突き抜け、誤解を恐れずに言えば真のリアリズムに達したんだ。透谷は内部を発見したのではない、内部を動かす神という絶対的外部をつかんだのである。そうだとすれば、これまでの内部生命論的透谷観はここでコペルニクス的展開をすることになるだろうという、ちょっと爆発的な宣言をやっているわけです。

私はそれを聞いて非常に感銘を受けまして、長年考えていたこの一神教という問題、キリスト教、キリスト教というけれども、われわれは汎神論の世界である。透谷も汎神論だというふうになっていますけれども、やっぱり一神論という絶対的なものを信じるか信じないかといいますか、絶対的なものをどっかで持つ持たないかということが大変な違いになるんですね。この問題がやっぱり宇宙の精神、神なるものの評価として、ちょっと私の文章をまたコピーしてみました。

「宇宙の精神即ち神なるもの」が読めてなければ「内部の生命」も読めていないことになるのだ。「宇宙の精神即ち神なるもの」をたんに通俗的に汎神論だと言って済ませるのではなく、ふたたび新保氏の言葉を借りるなら、日本思想史における「一神教への要求」のなかで考えねばならない。「日本思想におけるキリスト教・あるいはそれが明瞭に提出する、絶対という問題は、最もクリティカルな問題であり、この問題に対する反応の深浅によって、その人間(日本人)の思想の深浅を測ることもできるであろう」と新保氏は言っている。これまでの「内部生命論」理解は、神によってしか造れぬ絶対的深さに達していなかったと言えよ

う

と言いましたが、この「宇宙の精神即ち神なるもの」というのは、われわれが透谷が実感していたような理解が同じにできなくてもいいんですが、宇宙の精神、神なるものというのがこの宇宙にあるということについて考えられるかどうか。透谷研究者はどうも口では言っても、それほど考えになかったと思います。

これは私に言わせますと、「内部生命論」と戦後の史的唯物論ということですが、私は色川さんの本の「内部生命論」のところを引きまして、内部生命というのは観念的に見えるけれども、熱意と情熱という、そういうものによって「内部生命論」は現実に対抗して働くということをずうっと前に北海道教育大学の安住誠悦という教授が言っているわけですけれども、それを色川さんは引用されているわけです。

私はそれを批判した論文を二十五年前に書いているわけですが、色川さんが安住論文を引いておられるものですから、次のように言及しました。

これを読むと二十五年前に引き戻されるような思いであるが、色川氏の問題でなく、言ってみればいかに戦後の史的唯物論の呪縛が固かったかが知られる。もとより史的唯物論とここで言うのはひとつの比喩ではあるが、神の外には動かせぬ沈静不動の「内部の生命」といった非弁証法的なものは受けつけられず、「唯心的、現世超越的な方向」をマイナス感覚でとらえ、「内部生命」を何とか現実に立ち向かわせようとするところに、戦後の透谷像（言ってみれば近代自我的透谷像）があった。

史的唯物論とひと口に言いますけれども、まず『空想より科学へ』というエンゲルスの岩波文庫☆一つから入りまして、そして『唯物論と経験批判論』へ、僕らも戦後、軍国少年から今度はマルクス青年に変わって勉強してきましたし、『レーニン主義の基礎』なんていうものを英語でも読み、合宿もしたし、学生でありながら病院へチューターとして派遣されて、経済学教科書なんていうものを読んだり、いろいろしたんですが、どうもこの冷戦構造が崩れて、ソ連邦が崩壊し、ベルリンの壁が落ちるというような中で、いままでの透谷像の立て方が、いままでの立て方の歪みといいますか、こういう「宇宙の精神即ち神なるもの」というのが本当に評価できないような状況ということがあったんじゃないかというふうに反省するわけです。

これはちょっと余談でありますが、いま「リアル」という言葉が流行しているようです。この十一月十八日付の「週刊読書人」で中沢新一さんと岡崎京子というマンガ家の若い女性の方との「リアルをめぐって」という対談を読んだわけですけれども、リアルという言葉は昔から使っていたのに、いまリアルが流行するのはなぜかといいますと、どうもベルリンの壁以後じゃないかと言っています。つまり冷戦構造が崩

れたということでもあるし、とにかくその後でリアルということが起こってきた。

いうなればいままでメガネをかけていたんですね。史的唯物論というメガネ、それをはずしたときに、よく見えるものができてきた。

史的唯物論というのは一つのイデオロギーかもわかりませんが、私はいまなお史的唯物論というのを否定し切る気持ちはないんで、エンゲルスの『空想より科学へ』というのはいまだに私はそれを否定する気持ちはないんですけれども、しかし、プロレタリア文学を見るときに、「ナップのメガネをはずせ」と言われましたが、ナップのメガネで見ていると「文芸戦線」がわからないというのと同じなんで、どうもはずしたところにこの「リアル」という言葉が現在流行として出てきたんじゃないかという気もいたします。

この問題として、「没後百年の透谷像」といった場合に、この戦後の透谷像のかけていたメガネというものがどういうメガネであったか、そのメガネをはずしたら何が見えてくるか、そういう問題としていま申し上げているわけであります。

最後の五として、特に透谷と「早稲田文学」という雑誌についてお話したいと思います。先ほど図書館のほうから「早稲田文学」を踏まえた百年の早稲田の文士といいますか、文学者の記録、すごく厚い記録、写真をいただきましたけれども、「早稲田文学」は早稲田の文学の伝統を形づくってきた大事な雑誌で、明治二十四年に出まして、一ぺん終わってから、東京専門学校がなけなしの金を払って初めて留学生として島村抱月をイギリスに送りましたね。彼が帰って来て明治三十九年からまた第二次をやります。両方とも復刻されまして、私は両方とも自分の家に持っておりますが、今回、透谷の評伝の前に「早稲田文学」をひもといてみました。で、「早稲田文学」による評価と新事実というようなことをちょっとお話しておきます。

「早稲田文学」という雑誌は、彙報欄がありまして、文界、文学雑誌等のニュースと、文壇の動向とか、そういったものを丁寧に再録するところなんです。もともと坪内逍遥は記述派と申しまして、森鷗外のように理想的に、観念的に言うんじゃなくて、事実を記載していくという、そういう記述派であったわけです。そのせいか、この「早稲田文学」というのは資料的に非常に役に立ちまして、それを見ますとどういうことがあったかということが実にわかるわけで、文学史を書くときにはこの「早稲田文学」の彙報欄を見ないと書けないわけですね。

私も『日露戦後文学の研究』という本を数年前に出しましたけれども、この「早稲田文学」の彙報欄において「新しい文学が出現した。それは漱石と独歩と藤村である」というようなことも「早稲田文学」からヒントを得て、太平洋戦後文学ではなくて、日露戦後文学ということを考える一つのヒン

トになったぐらいです。

そのうち一つは、筑土文學會ですね。筑土八幡というのが神楽坂の近くにありますが、そこで文學會が開かれたんです。第一回は最近の年譜に載っているんですけど、川崎さんが今度『透谷と近代日本』という論集に付けられた詳しい年譜でもこの第二回は出ていませんね。第一回はもちろん載っておりましたが、この第二回も「早稲田文学」に出ています。

筑土八幡境内の松風楼で、「本日八日午後四時例の松風亭にて開かれたり集まれる人々は大西祝、植村正久、志賀重昂、松村介石、戸川殘花、宮崎湖處子、内田不知庵、北村透谷、尾崎紅葉、山田美妙、(もうそうそうたる連中が集まっているんですね。尾崎紅葉と北村透谷もここに一緒にいるんで、山田美妙もいるんですね。宮崎湖處子もいるし、内田不知庵もいると。もう大変なもので。そして)松村氏は前會よりの約により談話の主題として「文章朗讀法につきて」を呈出せり。(問題を一つ出しておきまして、それを報告者は報告して、そして、)美妙斎山田氏は嘗てこの事に就きて宿見もあり實際の経験もあればと人の謂ふに任せてまづ饗庭、幸堂、坪内其の他諸氏の朗讀法を……」

と、こういうことがあったということが「早稲田文学」でわかるわけですね。明治二十六年七月八日のことです。

まだいろいろあるんですが、もう少し違う問題にいきましょう。

彼が最後に、もう死ぬ前に書いた「劇詩の前途如何」という大事な演劇の論文があります。彼がもう体をこわして、短刀で咽喉を突いて自殺未遂を十二月にやっているんですが、そういうときにこれだけの具体的、かつ実践的、本質的、そういう演劇論が書けたということは不思議な気がするんですね。

色川さんのご本でも、「劇詩人の生涯」というものを設けまして、劇詩人としての透谷を改めて論じるということをしているぐらい重要なんですが、その最後の「劇詩の前途如何」というものを「早稲田文学」はどんなふうに扱っているかということなんです。

これも長くは申し上げませんが、もともとこの「劇詩の前途如何」ということを透谷が書くにつきましては、「早稲田文学」に責任があるんですね。「早稲田文学」は史劇論というものを提唱するわけです。早稲田大学の中心人物である高田半峰は読売新聞で脚本募集をやるというふうに演劇というものを盛り上げていくわけですね。それに応えるために透谷はこういうすごいものを書いたわけです。

ところがですね、「早稲田文学」はそれをどう扱ったかというと、「早稲田文学」明治二十七年十一月の「文学現象」欄は、「文学界」十二号について、「深草元政(残花)」「劇詩の前途(透谷)等」、これだけ書いてあるだけ。一行を掲げたのみで「劇詩の前途如何」、この点を打ったのは、この「如何」

という字さえ入っていないということですね。これは皮肉ですけれども。「如何」ということをとにかく「早稲田文学」は取り上げなかったということですね。紹介、論述することはなかった。

これは透谷はガッカリしたと思うんですね。しかし、もちろん透谷は死んじゃっていますから、これは死んだ後の透谷の話ですけど。

私も透谷の最後のすごい論文が肝心の「早稲田文学」がこんな形でしか、しかも「如何」という字さえ落としちゃっている。ほんとに〝いかん〟ですね。「劇詩の前途はどうであるか」ということを言って、「どうであるか」という言葉さえ落ちているぐらいですから、ほんとに透谷の虚しさというのは、地下の透谷に対して心から同情するわけですけれども。「早稲田文学」はだめだと言っているわけじゃないんですが。

そこで三番目、「早稲田文学」の透谷死亡記事というところをちょっと読ませていただきます。大体が、この死亡記事は朝日新聞がとても好意的に書いています。透谷は東京朝日とはあまり関係はないんですけれども、よく書いています。首吊り自殺をしたわけですから、そのことを「ブランコ往生をした」とひやかした新聞もあったんですが、それを朝日新聞は、「昨冬より神経病に罹り療養中のところ、昨夜、病のために変死せり」と書いてある。これはおかしな話なんで、「病のために変死せり」とはちょっと矛盾していると思いますけど、まあそれはそうかもしれませんが。

「早稲田文学」を見てください。旧師逍遥の指示もあってか、「透谷子逝く」として、次のように報じています。透谷は「早稲田文学」にものを書くことはなかったんですね。注文がこなかった。「早稲田文学」は透谷をそんなに評価しなかったのかどうかわかりませんが。

「楚囚の詩」「蓬莱曲」の著者として「文学界」記者として、高踏派詩人として才名を知られたりし透谷北村門太郎氏は昨冬より病に罹り（これは朝日新聞と同じ）芝公園の僑居に養生し迫々快き方なりと聞き及びしに（これは好意的に書いてあるんですね）去十五日遂に異郷の客となりぬ享年僅かに二十有七、（この中で変死したとは全然書いていませんね。これはやっぱり好意なんですね）「十二文豪」最近刊の「エマルソン」は実に同氏の絶筆なりき、氏が友山路愛山氏哀悼して曰はく

山路愛山の哀悼文にやはり「早稲田文学」の編集の人は魅かれたんですね、感銘を受けたんですね、で、「早稲田文学」に引いている山路愛山の文章を読んでみます。

竹越君曰く（竹越与三郎という民友社の人です）透谷と月下に語れば清風飄渺として神仙の如し亦俗界の人に非るを覚ふ、蘇峯氏予に謂って曰く透谷は銀匙なり君（山路愛山のこと）に至っては及ち鉄瓶のみと（まあ鉄瓶もいいですけど、銀匙は小さくてあれです、うまいことを言ったも

んですね）彼が超俗の資は我儕の同じく認識する所なりき
嗚呼文界は多望の詩人を失ひぬ

として、「諸新聞紙透谷を悼むの詩歌を載する少からず本誌にも別に二三の挽歌を掲げたり」といって書いていますが、非常にシンパシーのこもった追悼文でありまして、これはやはり逍遥の気持ちもあるんじゃないかと思いますが、愛山の文章はいまここに書いておりませんけど、ついでに出しておきますと、

いまや彼逝く。文界は多望の詩人を失ひしなり。我らは愛すべき朋友を失ひしなり。而して予は最も無邪気にして最も信頼すべき論敵を失ひしなり。民友社中彼と交わる最も親しき者は予なり。いづくんぞ一片の愛なきを得んや。それ彼が遺書たる「エマルソン」に至っては今日の文学世界絶好の散文たるは予自ら公論あり。我儕の諛辞を要せざるなり

と、透谷が命をかけたと言ってもよいこの刊行されたばかりの『エマルソン』をこういう形で言い添えていくという、その心の細やかさ、この愛山の友情というのは改めて深く驚かざるを得ないということになります。

先ほど申しましたが、私の本の後書きに書いたことをちょっとかいつまんで話して終わりにしたいと思います。透谷の最後の著作は『エマルソン』でした。その『エマルソン』というのはとても難しい。最近の英文学者の研究によりますと、透谷は当時はいまのマスターコースに上がっているぐらいの年ですから、二十五歳ちょっとですね。それでいながら英語の力は現在の大学教員の平均英語力より上だというんです。大学の英語教員の学力というのはどのぐらいかわかりませんけれども。その上の学力で読み、しかもなおかつエマルソンの持っている特徴というものを受け継いでいるというふうに現在ＩＣＵの斉藤和明先生が評価しております。

その最後の著作『エマルソン』の最初にこういうことを書いています。「大いなるジニアス（ジニアスは天才ですね。神才という字を当てています）は短き伝記を有す」。これはエマルソンが言った言葉を引いているものです。

山路愛山は人生相渉論争で透谷に反論している中でも、「キリストの事業は三年の伝業に終わらざるを知らば」、キリストは三年間伝業したわけですね。ところが三年じゃないですね。カッコして、「彼の事業は万世にわたれる事業なり」。キリストが亡くなってからいま二千年経とうとしています。だからキリストは二千年は生きているわけですね。今後も生きるでしょう。透谷は没後百年ですから生きていますね。後の百年はわかりませんけど。

もう一ぺん申しますと、「キリストの事業は三年の伝業に終はらざるを知らば、彼の事業は万世にわたれる事業なり。エマルソンの言へるごとく、大著述家は短き伝記を有することを知らば」、文章はすなわち事業であるのは当然だと彼は言っ

たわけですね。知らずして論敵の透谷と愛山はエマルソンを使って、「大いなるジニアスは短き伝記を有す」「大著述家は短き伝記を有す」と。私の透谷の伝記は短くない伝記かもしれないんですけれども。しかし、短くない伝記を使わなきゃならないほど透谷の短き伝記がすごいということも言えるわけです。

この二十五歳に満たない青年が、その『エマルソン』を書いた頃はまだ二十五歳になっていませんからね、大学の英語教師の平均より高いという英語力で書いたという、それ一つ見ても、透谷はどうも大著述家、大いなるジニアスじゃなかったかと思われるんですけど、あんまりそれを言うと透谷神社の神主だと言われるかもしれないんで、やめておきたいと思いますが。

ここで私が申し上げたいことは、文章、文学の力ということですね。透谷が没後百年にこうして講演会でこういうふうに私が話をさせていただき、皆さんに聞いていただくというようなことも、これは透谷が生きているからでありまして、文章の力なんで、最後の私の評伝の後書きの二、三行を申し上げて終わりにしたいと思います。

イエス・キリスト三年の伝業が二千年にわたり、透谷はたった二年、『楚囚之詩』が出てからだと五年ぐらいですけど、その透谷二年ないし五年の文業は百年にわたって今日に及んでいるということは確かな事実であります。透谷は二十五歳と五カ月で亡くなったわけですから夭逝したんですね。夭逝した詩人、たった二十四、五歳の若い幼稚な者が書いたものを、その倍以上生きている人間、まあ私もその一人ですけれども、それが一生懸命になってやっているなんて滑稽だというようなことを上野千鶴子さんが『文学』の特集で書いていますけど、確かに滑稽かもしれませんけれども、私が申し上げたいことは、イエス・キリスト三年の伝業が二千年にわたり、透谷二～五年の文業が百年にわたっているわけですから、それを考えますと、夭逝した詩人、すなわち短き伝記の詩人を笑う者は、愛山がイエスやエマルソンを利用して言い切った文章、文学の万世にわたれる力、透谷のこの百年にわたるこの力というものを全然理解できていない人間の言い方だと、私の本には上野さんの名前は書いてありませんで、ここだけで言っているんですけど。(笑)あの方はとってもいい人なんですけれども、これはやはり言っておかねばならないと思うわけです。

しかしとにかく「わが仏尊し」であってはいけないわけで、透谷がそんなに偉い人ならば、もっと広く……。私は実はこの五月に、色川さんもご一緒ですけど、ハーバード大学のライシャワー研究所主催の「明治研究学会」で、「透谷とアメリカ革命」という発表をやったんですね。つまり、透谷がどういうふうにアメリカの独立運動の影響を受けているかという問題を取りあげたわけですが、考えてみますと透谷の翻訳な

んて出ていないんですね。だから国際的にはほとんど知られていないんで、ドナルド・キーンさんが文学史で透谷をかなり論及しておりますけどね。

とにかくそういう問題でありまして。私たちは透谷百年の仕事を、「わが仏尊し」じゃなくて、内外に広く訴えていかないといけない。この講演会もそういう形で催されたものだと思います。こういう会にお招きいただいて、大変早口で、拙い、意味不十分なお話をさせていただきましたことを、改めて感謝申し上げまして終わりにさせていただきます。（拍手）

○司会

どうもありがとうございました。平岡先生のご研究はきわめて実証的なご研究であると私どもは学んでいるわけですけれども、まさに平岡先生の真髄がよく表れたお話をお聞きできたのではないかと思います。

先生にきょうお話いただきました『評伝』は十二月ぐらいには出されるというようなことでありますので、また出ましたらお読みいただければというふうに思います。

なお、展示会にはいろいろ協力をいただきまして、図書館の展示場のほうでやっておりますけれども、特に町田の自由民権資料館の方には大変お世話になっております。その上きょうは透谷展をやりました関係資料を後ろにわざわざ持って来ていただいて、きょうのこの時間のためにだけ展示をしていただいております。大変ありがたい話でありますけれども、どうかご覧になって透谷関係の知識を広めて、またいろいろと考えていただきたいというふうに思います。

いまの平岡先生のお話にご質問などあるかと思いますが、それは紙に書いていただいて、なるべく時間のロスを少なくしたいと思いますので、私のほうに出していただくということにいたしまして。

大変密度の濃いお話で、やっぱりちょっとお疲れになったと思いますので、五分ぐらい休憩いたしまして、色川先生のご講演を賜るということにしたいと思います。

（休憩）